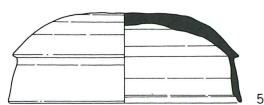
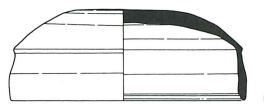


第211図 古墳時代後期の土器

SJ133



5

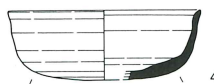


6

SJ34

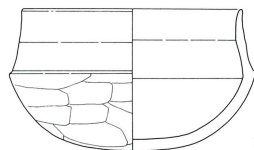


3

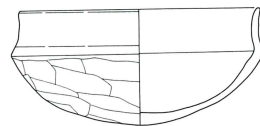


4

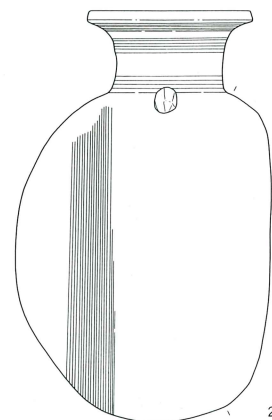
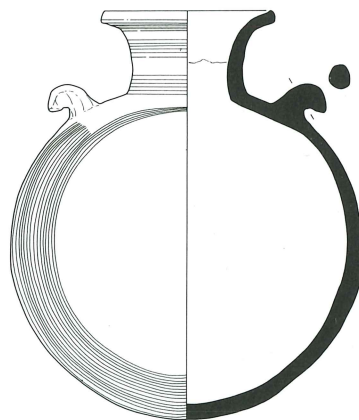
SJ80



1



2



27



3. 窯跡出土の土器

如意遺跡の荒川上流対岸の丘陵地帯には、末野窯跡群が分布し9世紀代を中心とした操業年代で、7世紀代前半にまで遡る可能性が指摘されている。また、末野窯跡群対岸の荒川右岸では2支群が確認され、折原窯跡では10世紀前半代に高台付坏が生産されている。桜沢窯跡は末野窯跡群の東方にあり、末野窯跡群が丘陵部に位置するのに対し段丘上の平坦部に2基の須恵器窯跡が検出された。

如意遺跡の窯跡は1基単独ではあるが、河岸段丘上の平坦部に立地するという桜沢窯跡との共通点がある。

第1号窯跡では、灰原などが確認されず窯跡本体のみの検出であった。焼成部には炉壁が内部に崩れ落ち、その下に土器が検出された。土器は前述のとおり焼成が不良であるが、還元焼成している。出土遺物は、須恵器高台付碗・鉢・甕であるが、高台付碗は高台部のみで、鉢も残存が少なく復元図の1点だけで、主体

を占めるものは甕である。口縁部も出土しているが、胴部だけの出土が多く最大径22～25cmの中型の甕である。

高台付碗は全体的なプロポーションは不明であるが、特徴として高台が非常に低い点があげられる。また、高台径は、5.8cm、5.9cmと1点が6.4cmと6cm程度である。高台の形態は、短く直立するもの、短く直立するが底部との境はあまり明瞭でないもの、短く外側に張り短面が外傾するもの、僅かに外側に張り底部との境が不明瞭なものの4タイプがみられるが西浦北遺跡第4号住居跡や台耕地第77号住居跡・第78号住居跡に類例を求めることができる。また、甕はいずれも粘土帯積み上げ痕が顕著で横ナデし成形されており、台耕地第77号住居跡の甕と成形方法が同一の手法とみられる。

如意遺跡の窯跡の年代については、桜沢窯跡とはほぼ同時期の9世紀末から10世紀第1四半期と考えたい。

桜沢窯跡と同時期と捉えられている西浦北遺跡第4号住居跡からは、K-90号窯式の灰釉陶器が出土し、同時期に捉えられている台耕地第78号住居跡に先行する第77号住居跡からもK-90号窯式の灰釉陶器が

出土している。さらに、沼下遺跡第3号住居跡からも同期に並行する末野産須恵器とともに、K-90号窯式の皿が共伴している。

引用参考文献

- 赤熊浩一 1988『将監塚・古井戸―古墳・歴史時代Ⅱ―』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第71集
- 磯崎一ほか 1997『今井川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第191集
- 剣持和夫 2000『築道下遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第245集
- 小久保徹ほか 1979『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書 第21集
- 酒井清治 1984『台耕地(Ⅱ)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第33集
- 佐藤忠雄 1979『大寄B遺跡・西浦北遺跡』埼玉県大里郡岡部町教育委員会
- 立石盛詞 1983『後張Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第26集
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 昼間孝志 1994『桜沢窯跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第143集
- 増田一裕 1987『南大通り線内遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告 第9集 第1分冊
- 増田一裕 1989『南大通り線内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』本庄市埋蔵文化財調査報告 第9集 第2分冊
- 増田一裕 1987『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告 第10集
- 大和 修 1982『沼下・平原・新堀・中山・お金塚・中井丘・鶴巻・水久保・猪久保遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第16集